

## 報告

# 学生が体験した患者との関わりにおける困難と困難からの学び取り

## —基礎看護学実習Ⅱを通して—

井村香積 高田直子 新井龍 坂口桃子  
滋賀医科大学医学部看護学科基礎看護学講座

### 要旨

本研究の目的は基礎看護学実習Ⅱを体験した看護学生が患者とのコミュニケーションで困惑した場面を明らかにし、患者との関わりについての学びを明らかにすることにより、今後の教育方法の基礎資料とする。対象は第2学年次の看護学生で、実習終了後の課題レポートより、困難と感じた場面と、その困難からの学びに関連した記述を抽出し、質的帰納的に分析した。その結果、看護学生が患者との関わりが困難と感じるのは、[患者のプライベートに踏み込むことへの戸惑い]、[家族と関わることへの戸惑い]、[異世代とのコミュニケーションをとることへの戸惑い]、[患者教育に対して]の4場面であり、その場面より、看護学生は患者を理解するために【患者像把握のためのコミュニケーション】を行い、カンファレンスで【不自然な会話】に気づき、【効果的なコミュニケーション】や【患者の状況に応じたコミュニケーション】といった、患者と関わる上で、留意すべき具体的な対策を見出し、見出された方法を翌日に実施し、【コミュニケーションより患者の思いを推察】していた。

キーワード；基礎看護学実習、体験学習、患者・看護学生関係、コミュニケーション

### I. はじめに

患者の健康問題に適したケアの方法や目標を設定するためにも患者とのコミュニケーションは重要である。しかし、現在の学生は、少子化、核家族化、遊びの場の減少により、人との関わりが少ないためにコミュニケーション能力が低下していると指摘されている<sup>1)</sup>。先行研究においても、看護学生は患者とのコミュニケーションに困惑していることを報告した<sup>2)</sup>。コミュニケーション技術の向上や人間関係では、体験学習が有効であると述べられているため<sup>3)</sup>、本研究では、体験学習のステップに基づき実習を実施した。本研究の目的は、看護学生が患者とのコミュニケーションで困惑した場面を明らかにし、患者との関わりについての学びを明らかにすることにより、今後の看護学生のコミュニケーション能力教育の基礎資料とする。

### II. 研究方法

対象；2008年9月5日～19日の基礎看護学実

習Ⅱに参加し、本研究に同意を得た2年次、看護学生の53名（回収率89.83%）の振り返りレポートである。

実習目標；入院生活を送る患者を理解し、生活を整えるために必要な看護技術を状況に応じて判断・選択して実施するための基礎的能力と人間関係を形成し看護過程を用いて患者の看護上の問題を解決する手法の基礎を学ぶとし、10日間の実習を行った。

実習方法；最初の2日は学内で、患者の気持ちを理解するために必要な人間関係についての講義と状況設定をしたロールプレイングなどを行った。

病棟実習では、前半の2日間は見学実習、後半の5日間は学生1人に患者1人を受け持ち、患者との関係を築きながら、看護展開を行った。後半の5日は、津村らの体験学習のステップをもとに、実習を行った。図1は体験学習ステップを示している。受け持ち患者との関わりを体験とし、実習終了後、カンファレンスにおいて、学生達が体験

したプロセスを振り返りグループ内で指摘しあい、実習での体験をわかちあう。そして、そのプロセスを学生達が分析し、翌日どのような行動をとるかまで仮説をたて、それらの話し合った内容を翌日の実習に試行するという過程をとった(図1)。

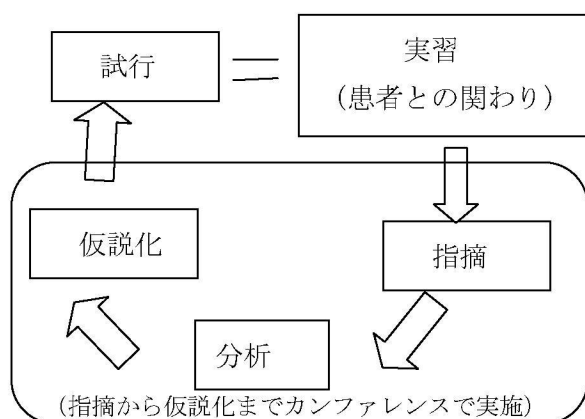


図1 実習における体験学習

### 用語の定義

体験学習とは人間の行動を何がおこったか指摘し、どのように起こったかを分析し、考察したことをもとに、仮説化しその仮説を実行することである。

### 倫理的配慮

レポート提出時に研究の趣旨を説明し同意が得られた学生のレポートのみ採用した。また、対象レポートは氏名・学籍番号を削除してコピーしデータベースに匿名性を持たせた。

### 分析方法

分析は質的帰納的方法で、振り返りレポートをデータベースとし、患者との関わりを困難と感じた場面と、その困難からの学びに関連した記述に焦点を当て意味内容が損なわれないことがないよう留意し、1記述1単位とし要約した。意味内容の類似するものを集約しサブカテゴリーとし、さらに、それらを集約してカテゴリーとした。

## Ⅲ. 結果

学生は受け持ち患者と関わり、関わりが困難と感じた状況は4場面であり、さらに、その困難の場面からの学びは11サブカテゴリーから5カテゴリーを抽出することができた(表1)。

以下、カテゴリーを【】、サブカテゴリーを[]で表す。

### 1. 関わりが困難と感じた場面

患者の個人的な内容をどこまで、突っ込んで聞いていいのだろうかといった[患者のプライベートに踏み込むことへの戸惑い]、家族が面会に来ているがどのように関わっていいのかといった[家族と関わることへの戸惑い]、日常生活で年配の人と話したことがないのでどうしようといった[異世代とのコミュニケーションをとることへの戸惑い]、患者が入院生活で指示された治療が守れてないときにどうしようといった[患者教育に対して]の4サブカテゴリーが抽出された。

### 2. 患者との関わりからの学び

#### 1) 【効果的なコミュニケーション】

学生は患者と関わり、患者と関わっていく上でよりよいコミュニケーション方法を見出していることを意味している。これは[具体的なコミュニケーション方法]、[笑顔での対応]、[患者のペースに合わせた会話]、[双方のコミュニケーション]の4サブカテゴリーより構成されている。

#### 2) 【患者の状況に応じたコミュニケーション】

このカテゴリーは患者と関わる際、患者の状態を判断して関わることの必要性を意味しており、[情報を聞き出すタイミング]、[コミュニケーションを図るタイミング]の2サブカテゴリーより構成されている。

#### 3) 【コミュニケーションより患者の思いを推察】

学生は患者との会話や雰囲気より、患者の気持ちを考えている。このカテゴリーは[患者の気持ちを察知]、[ノンバーバルコミュニケーションの観察]より構成されている。

#### 4) 【患者像把握のためのコミュニケーション】

学生は患者がどのような人物かをイメージす

るために、患者とコミュニケーションをはかろうとしていた。このカテゴリーは「ケアのためのコミュニケーション」、[患者を把握する努力]のサブカテゴリーより構成されていた。

#### 5) 【不自然な会話】

学生は患者と会話する際に、スムーズな会話ができずに、患者に質問しそれに対して答えるという「一問一答式の会話」のサブカテゴリーより成り立っていた。

### IV. 考察

#### 1. 患者に聞くに聞けない学生の思い

実習での学生の学びでは、患者の気持ちを考えることができたと報告されている<sup>4)</sup>。一方で、患者と看護学生間での感情のズレについての指摘がされている<sup>5)</sup>。本研究の結果において、学生は患者との関わりが困難と感じた場面を見ると、学生自身の発言により、患者を傷つけてしまうのではないかという恐れが原因となり、患者と話したくても話せない状況であったと考えられる。これは、学生自身のなかで、患者と深く関わる前に、学生なりの患者像を作りあげていたという点では、患者と看護学生との間に感情のズレがあったといえる。今後、実習に参加する前より、看護師としての関わり方を学生自ら考えることができるような指導が必要である。

#### 2. 患者からの関わりからの学びの関係性

学生は患者のことを理解しようと積極的にカルテなどより、[患者を把握する努力]をし、患者にどのような質問をするか「ケアのためのコミュニケーション」を考えるとといった【患者像把握のためのコミュニケーション】を行っていた。しかし、実際に学生は患者と関わり、患者に質問しそれに患者が答えるという「一問一答式の会話」のような【不自然な会話】に気づいていた。そして、実習終了後、患者との関わりをカンファレンスで話すことで、[具体的なコミュニケーション方法]、[笑顔での対応]、[患者のペースに合わせ

た会話]、[双方のコミュニケーション]といった【効果的なコミュニケーション】や「情報を聞き出すタイミング」、[コミュニケーションをはかるタイミング]といった【患者の状況に応じたコミュニケーション】といった、患者と関わる上での留意すべき具体的な対策を見出していた。さらに、カンファレンスで見出された方法を翌日に実施し、[ノンバーバルコミュニケーションの観察]より「患者の気持ちを察知」するなどの【コミュニケーションより患者の思いを推察】していたと考えられる。

### VI. まとめ

基礎看護学実習Ⅱ終了後の課題レポートより、看護学生の患者との関わりについてつぎの点が明らかになった。

1. 看護学生が患者と関わり困難と感じる場面は、[患者のプライベートに踏み込むことへの戸惑い]、[家族と関わることへの戸惑い]、[異世代とのコミュニケーションをとることへの戸惑い]、[患者教育に対して]であった。
2. 患者との関わりからの看護学生の学びは、【効果的なコミュニケーション】、【患者の状況に応じてコミュニケーション】、【コミュニケーションより患者の思いを推察】、【患者像把握のためのコミュニケーション】、【不自然な会話】であった。
3. 看護学生は【患者像把握のためのコミュニケーション】を行うが、カンファレンスで【不自然な会話】に気づき、【効果的なコミュニケーション】や【患者の状況に応じたコミュニケーション】といった、患者と関わる上での留意すべき具体的な対策を見出していた。さらに、カンファレンスで見出された方法を翌日に実施し、【コミュニケーションより患者の思いを推察】していた。

### 文献研究

- 1) 畠中徳子：家庭における人間関係の現実と課題－幼児期の親子関係の実現と課題－現代エス

学生が体験した患者との関わりにおける困難と困難からの学び取り

プリ, 447, 87, 2004

2) 井村香積, 高田直子, 新井龍, 作田裕美, 坂口桃子, 基礎看護学実習で体験した看護学生の思い—コミュニケーションを通して—, 滋賀医科大学看護学ジャーナル 6 (1), 46-49, 2008

3) 津村俊充: 人間関係トレーニング—私を育てる教育への人間学的アプローチ, ナカニシヤ出版, 5-10, 1992

4) 西沢義子, 花屋道子, 工藤せい子, 斎藤久美

子, 斎藤美紀子, 小倉能理子, 花田久美子, 看護学生の対応行動に関する研究—投影方法を用いた分析—, 日本看護研究学会雑誌 28 (1), 83-89, 2005

5) 佐藤美紀, 大島弓子, 小松万喜子, 曾田陽子, 田代ひろみ, 水野美香, 門井貴子, 患者との人間関係形成の初期段階における学生の主観的評価とその理由 基礎看護学実習を通して, 愛知県立看護大学紀要, 12, 17-22, 2006

表 1 患者との関わりからの学び

カテゴリー	サブカテゴリー	記述内容例
効果的なコミュニケーション	具体的なコミュニケーション方法	言葉使い大切 自分の言葉使い、話を聴く態度に注意する必要がある 自分がしゃがんで患者さんと視線の高さに合わせる事が大切 患者さんにできるだけ、話して頂いて、あいづちをうったり、その話題について質問したり聞き役にまわるなど
	笑顔での対応	笑顔で接することで気分が和らぐので笑顔が大切 学生であっても自分が不安な表情をすることは患者さんかなりの不安を与える
	患者さんのペースに合わせた会話	患者さんのペースで話すことが大切 沈黙も待って患者さんに合わせて会話をすることで、患者さんの話が始まり、会話が弾む
	双方のコミュニケーション	一方通行なコミュニケーションはだめ 相手に自分の思っていることを正確に伝える技術が必要 自分も心を開くことが大切
患者の状況に応じたコミュニケーション	情報を聞き出すタイミング	患者さんのペースに流される 自分の聞きたいことに話を持っていくことが難しかったり、なかなか切り出せず苦労した 沢山、世間話をし、更に一度話し始めるとなかなか話が途切れないなど
	コミュニケーションをはかるタイミング	患者のタイミングをはかって、患者の体調にあわせて話す 患者さんによって、また、患者さんの気分によって、患者の生活されている時間によって異なる 状態を観察してコミュニケーションをとる
コミュニケーションより患者の思いを推察	患者さんの気持ちを察知	質問内容や患者さんの体調や気持ちへの気遣い 相手の気持ちを観察する 話方、表情より、相手の気持ちを察するなど
	ノンバーバルコミュニケーションの観察	患者さんの表情・仕草を観察してなど
患者像把握のためのコミュニケーション	ケアのためのコミュニケーション	コミュニケーションとは自分が欲しい情報が聞き出せ、そうしてこそ患者さんに合った看護計画が立てられ、実施できるものである 会話の内容とケアを結びつけることが大切 コミュニケーションで情報収集を行い、ニーズを把握し、ケアにつなげていく コミュニケーションは情報収集するための手段 患者さんと楽しく話しているだけでは、ダメなど
	患者さんを把握する努力	傾聴や共感する姿勢をみせ、カルテの情報と統合しながら、患者さんの全体像を必死に把握しようとした 患者さんや、家族とコミュニケーションをとることで、患者さんのことを知る。
不自然な会話	一問一答式の会話	一問一答式ようになってしまった 質問ぜめになってしまった